松山城跡　改訂版（比企郡吉見町）

松山城跡へはここから登って行く

そこに立っていた説明板

史跡　松山城跡

この城跡は、市野川が形成した広大な低地に突き出た丘陵の東端に築かれており、戦国期に幾度もの攻防戦が行われた北武蔵地方屈指の平山城である。現存する城跡は当時の姿を良好にとどめており貴重な文化財である。

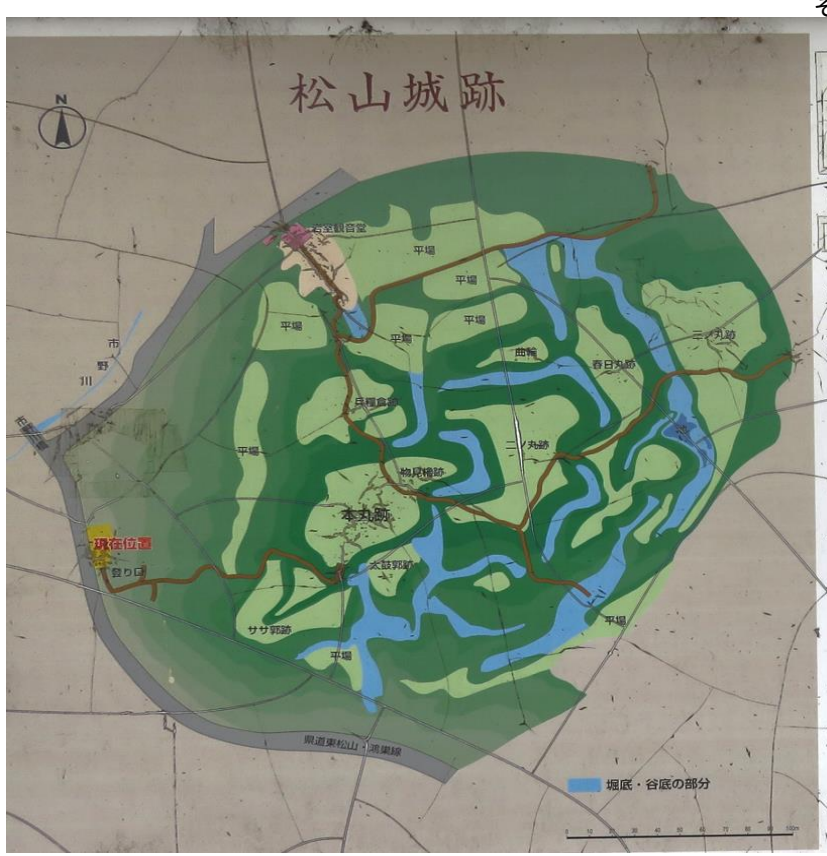
市野川に突き出た部分から本丸、二の丸、春日丸、三の丸が南西から北東に向って一直線に並び、その両側に多くの曲輪や平場をもっている。また、兵糧倉跡や物見櫓跡なども残されている。

城の歴史は古く、古代にさかのぼるとさえ言われるが、一般的には鎌倉時代□期の新田義貞陣営説、応永年間初期の上田左衛門尉築城説、応永二三年（一四一六）ごろの上田上野介築城説などがある。

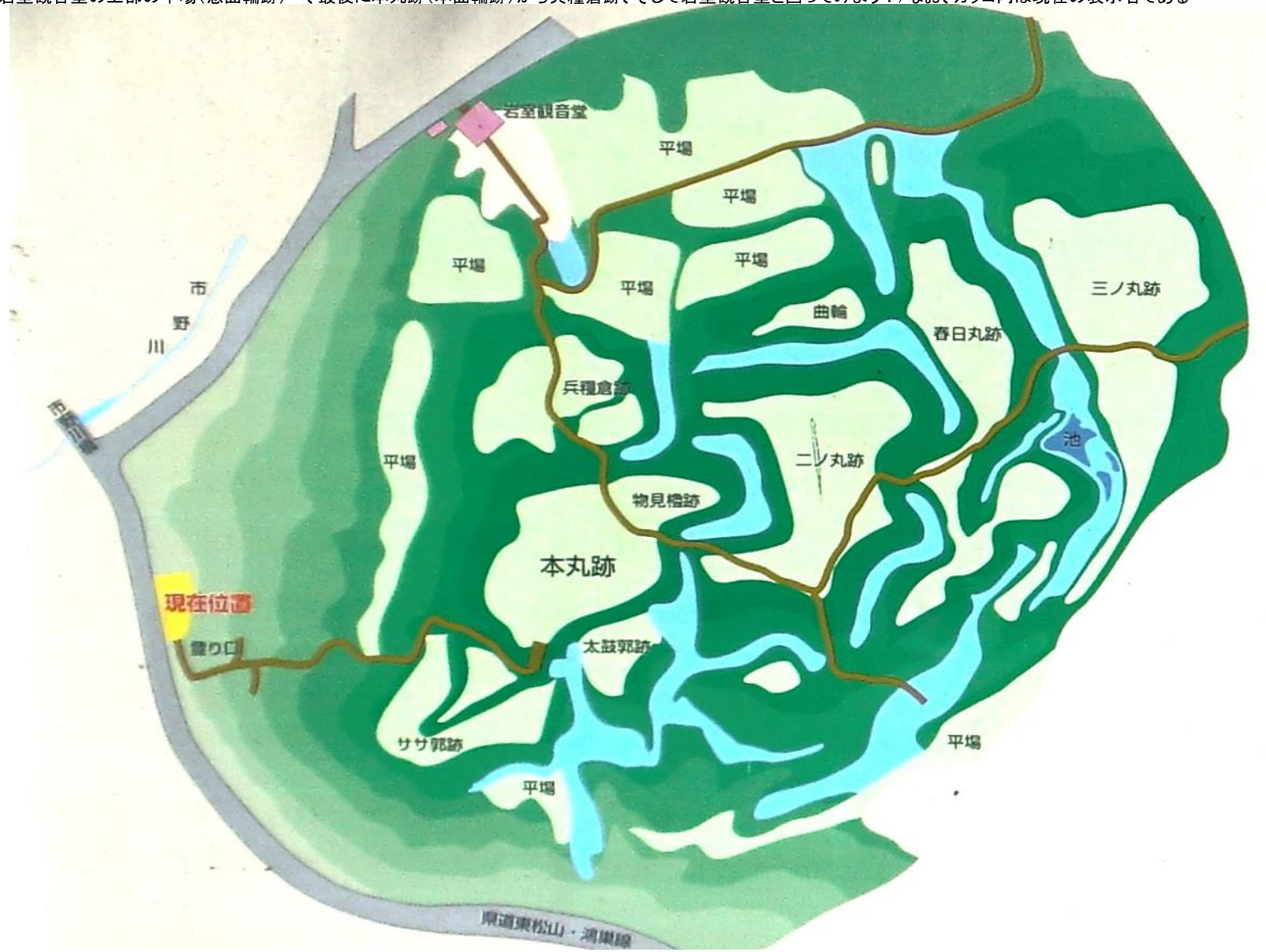
しかしながら、城郭としての体裁を整えたのは、十五世紀半ば太田氏が江戸・川越・岩槻の各城を築いた時期に近いものと思われる。

この城が天下に知られたのは、今から約四五〇年前の天文年間から永禄年間のことであり、城をめぐる上杉氏・武田氏・北条氏の争奪戦は有名である。のち豊臣勢に攻められて、天正十八年（一五九〇）に落城した。歴代の城主上田氏の滅亡後は松平家広の居城となったが、後を継いだ弟忠頼が慶長六年（一六〇一）浜松に転封されたのを最後に廃城となった。

□年に□指定史跡となっている。



現在位置から本丸跡（本曲輪跡）へ、ここでササ郭跡（笹曲輪跡）・太鼓郭跡（太鼓曲輪跡）・物見櫓跡を見て、二ノ丸跡（二ノ曲輪跡）→春日丸跡（三ノ曲輪跡）→三ノ丸跡（曲輪4跡）へ、その後、岩室観音堂の上部の平場（惣曲輪跡）へ、最後に本丸跡（本曲輪跡）から兵糧倉跡、そして岩室観音堂と回ってみよう！/なお、カッコ内は現在の表示名である



※　水色の所は堀底・谷底部分を表す

それでは登って行こう

この右手の上部が笹曲輪跡

video

振り返って見る/左手は笹曲輪跡

笹曲輪跡へ登ってみよう

こんな塩梅

振り返って見たところ

video

この階段を登った所が本曲輪跡

そこで、右下を見たところ/この辺りも笹曲輪跡の一部あるいは帯曲輪であろうか・・・ video

そこへ下りてみたところ

video

そこで、左手を見たところ

前方は堀跡（竪堀跡か？）のようである/この向こう側が太鼓曲輪跡のようだ

video

その堀跡の左方向を見上げたところ

反対の右下を見たところ

さて、階段を登って本曲輪跡へ到着！/標柱と説明板があった

video

松山城跡案内図
本曲輪

歴史

松山城の築城は、山内上杉氏・扇谷上杉氏らによる関東の動乱を背景とした15世紀後半という考え方が有力である。松山城が中世史上に登場してくるのは大永4年（1524）1月以降であり、室町幕府の要職にあった公方足利氏、扇谷・山内両上杉氏の対立から、関東制覇を進める後北条氏が進出する時期と言える。この中にあって関東各地は一気に戦乱の渦中に巻き込まれるが、松山城もその例外でなく常に戦略の最前線として、後北条氏・甲斐武田氏と岩槻太田氏・越後上杉氏との間で、幾多の合戦がくり広げられた。天正18年、豊臣秀吉による関東攻略が行なわれた際には、前田利家・上杉景勝の大軍に包囲され、4月下旬に落城した。徳川家康の関東入国の後は、松平家広が居城したが、跡を継いだ弟の忠頼が慶長6年（1601）に浜松城に移封されたのにともない廃城となった。

松山城跡は、平成20年３月28日に「比企城館跡群　松山城跡」として、「菅谷館跡（嵐山町）」「杉山城跡（嵐山町）」、「小倉城跡（ときがわ町・嵐山町・小川町）」と共に国指定史跡になった。

縄張

松山城は丘陵の先端部に築かれ、三方を市野川によって囲み、その流域には広大な湿地が広がる。眼下を流れる市野川は、城のある地形に突き当たって大きく蛇行し、その裾は荒々しく削り取られ急峻な崖地である。城の東側は荒川・和田吉野川の氾濫原で、北東側は丘陵と地続きである。城の曲輪配列は西から東に向かって、本曲輪、二ノ曲輪、三ノ曲輪、曲輪4が一直線にならぶ連郭式で、周囲は規模の大きな空堀が取り巻き、これを取り囲むように兵糧倉跡、惣曲輪等の大小様々な腰曲輪が配置されている。松山城は、東に広がる広大な関東平野と戦国期の山城が集中する西の山間部の分岐点に存在する北武蔵支配の重要拠点であった。また、この立地は扇谷上杉の家臣から、後に後北条の勢力下に加わった上田氏の支配域の東端と見ることができる。上田氏の比企地方における本拠は比企西部の小川・東秩父地域であり、東秩父村の安戸城及び菩提寺である浄蓮寺を西端とし、中城・腰越城・青山城・青鳥城などを経由し松山城を東端とする領域を支配していたことで知られる。

中世の関東

室町幕府の初代将軍足利尊氏は、幕府による全国支配を強固にするため、関東に鎌倉府を置き四男の基氏（もとうじ）を鎌倉公方として統治させた。その鎌倉府の要職に「関東管領（かんとうかんれい）」があり、上杉氏が代々世襲していた。この上杉氏に諸派があり、山内上杉（やまのうちうえすぎ）・扇谷上杉（おうぎがやつうえすぎ）が有力であった。この公方（くぼう）足利氏（あしかがし）・山内上杉氏・扇谷上杉氏らによる有力者同士の争いは、次第に激化・長期化し15世紀以降の関東地方は戦乱状態に突入していった。こうした室町幕府の旧勢力は、新興勢力の後北条氏の勢力下に統一され、関東の戦国時代は、後北条氏を中心に新たな局面を生み出した。

松山城関連年表

	和暦	西暦	事項
上杉段階	享徳4年	1455	鎌倉公方足利成氏、関東管領上杉氏らと分倍河原で戦う。上杉氏大敗。[享徳の乱]
	長禄元年	1457	太田資長（道灌）江戸城を築く。この頃、上杉持朝、河越城を築く。
	文明9年	1477	太田道灌、長尾景春と戦い、上田上野介や松山衆に河越城を守らせる。
	長享2年	1488	両上杉氏、松山で合戦。
	明応3年	1494	扇谷上杉定正、山内上杉顕定と高見原にて対陣。定正、荒川を渡ろうとして落馬し急死。
	永正2年	1505	山内上杉顕定、須賀谷に移陣を佐竹義舜に伝える。
	大永4年	1524	北条氏綱が江戸城を攻略し、扇谷上杉朝興は河越城から松山城に移る。
	天文6年	1537	扇谷上杉朝定、北条氏綱に破れ、河越城から松山城に逃れる。
	天文15年	1546	両上杉氏・古河公方、北条綱成の河越城を攻めるが敗れる。扇谷上杉朝定討死（扇谷上杉氏滅亡）、難波田善銀敗死。[河越夜戦]後北条氏松山城を攻略、坪和氏を城代に置く。岩付城主太田資正、松山城攻略。上杉憲勝を城主に置く。
	天文16年	1547	松山城、上田氏の内応により後北条氏が攻略。
	天文20年	1551	北条氏康、太田氏資に書を送り、松山着城を伝える。
	天文21年	1552	北条氏康、松山城普請。
	永禄3年	1560	古河公方足利義氏から芦名盛氏への書簡に、長尾景虎の関東出陣と北条氏康の松山着城を伝える。
	永禄4年	1561	岩付城主太田資正、松山城攻略。上杉憲勝を城主に置く。北条氏康、武田信玄に応じ松山城を攻める。
	永禄5年	1562	北条氏康、高坂に着陣。上杉憲勝、和睦により松山城を退去する。北条氏康・氏政、上田朝直に城を守らせる。上杉輝虎、松山城攻略。北条氏康・武田信玄、松山城を攻める。城主上杉憲勝防戦する。
	永禄6年	1563	松山城、後北条・武田軍により落城。上杉憲勝城を明け渡し、北条氏康、上田朝直に元の如く城を守らせる。

	和暦	西暦	事項
後北条段階	永禄7年	1564	北条氏康、松山城着陣。岩付城主太田氏資に人質を求める。
	永禄12年	1569	上杉輝虎、北条氏へ越相一和の条件として、松山城の引渡しを求める。北条氏康・氏政、上杉輝虎に松山は上田氏の本領であるとの書状を送る。北条氏政、上杉輝虎に松山は上田氏の本領であることを重ねて説く。
	元亀2年	1571	北条家、松山本郷町人に市の掟を発給する。
	天正元年	1573	上田長則（カ）、伝馬・諸公事などを松山本郷町人に15カ年間免除する。
	天正2年	1574	上杉謙信、松山城下など焼き払う。
	天正4年	1576	松山城主上田長則、松山本郷町人に町定を発給する。
	天正10年	1582	松山城主上田長則、松山本郷町人衆に荷留を命じる。織田信長の臣、滝川一益が箕輪城に入る。上田案独斎等、人質を箕輪城に入れる。
	天正12年	1584	上田憲定、下野足利攻めに出陣。
	天正13年	1585	上田憲定家臣岩崎対馬守、松山本宿代官に証状を送り、本宿地詰まりにより新宿創設を命じ、本宿・新宿とも町人衆に任せる。
	天正14年	1586	松山城主上田憲定、松山本郷新市場に市掟を発給する。
	天正17年	1589	松山城主上田憲定、比企郡かたよせ（東松山市）百姓に松山城登城を命じる。
	天正18年	1590	上田憲定、小田原籠城につき木呂子丹波守らに松山城の守備を託す。上田憲定、猟科人・負債ある者にも参陣を促し、扶持・賞美・取立てなどを約す。豊臣秀吉、後北条氏攻めのため京を発し、小田原に向かう。上田憲定、松山本宿・新宿町人衆に、世上火急につき松山籠城を命じる。北条分国諸城についての総軍勢配置記録に、松山城は太田氏房に属し、岩付城と合わせて千五百騎の兵力とされる。4～5月頃、松山落城。その後、5.20岩付城、6.14鉢形城、6.23八王子城、7.6小田原城、7.16忍城落城。
徳川段階	慶長6年	1601	徳川家康、関東に移封。松平家広、松山城に1万石で入封。家広の弟忠頼、5万石にて浜松城に転封。松山城廃城。

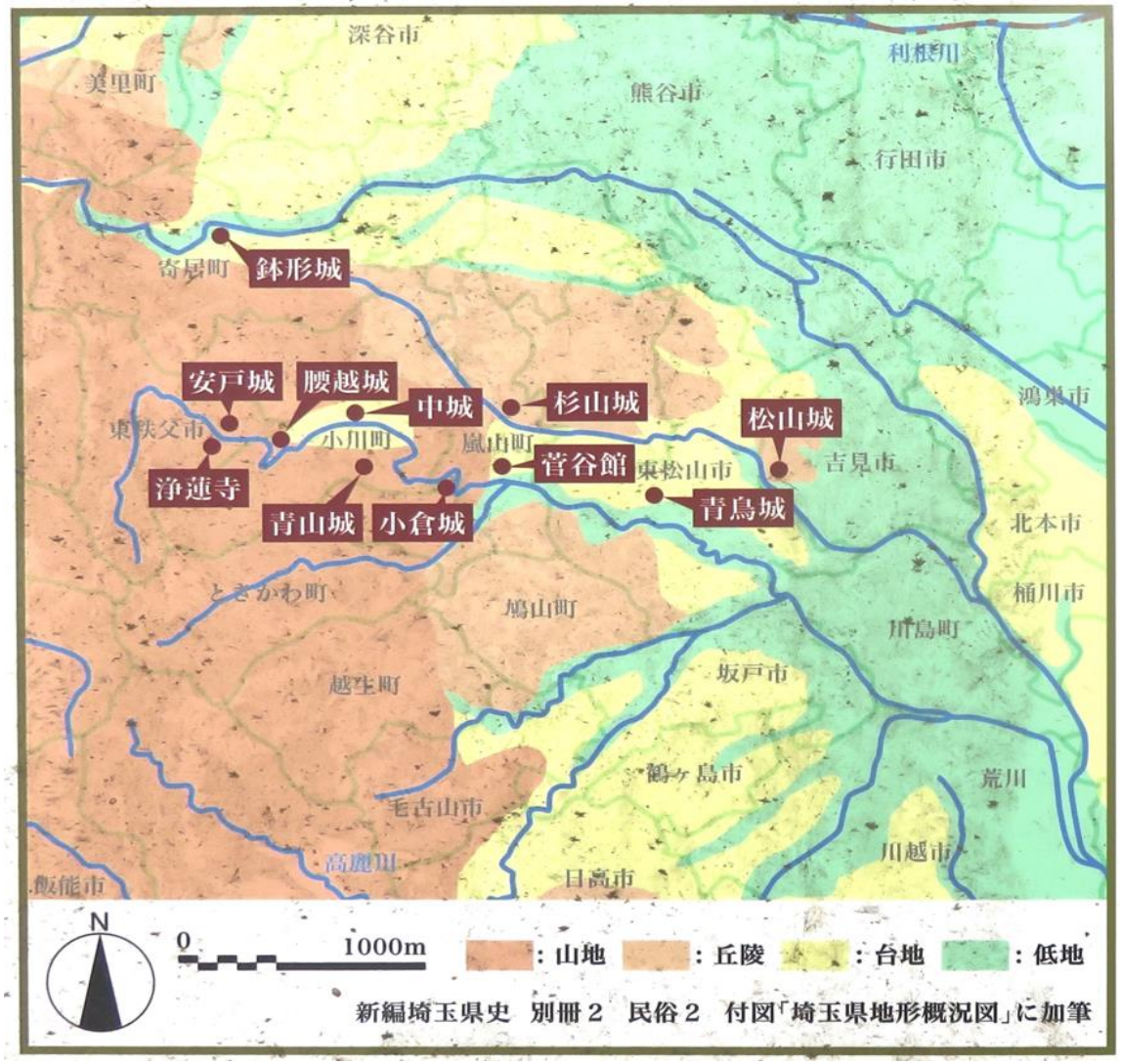
こちらの縄張図は現在の表示名で記されている

大堀や外郭は既に消滅してしまっているようだ

縄張図

本縄張図（梅沢太久夫氏作成）は埼玉県史測量図及び現況図などを合成した。

立地



新編埼玉県史　別冊２　民俗２　付図「埼玉県地形概況図」に加筆

左手から見たところ

video

ここにはかって社殿があったようだ

video

社殿跡を横から見たところ

video

同じく、背後から見たところ

video

マウンドの上に石碑が立っている

「松山城趾碑」とある/このマウンドは古い説明版では物見櫓跡と記されている

本曲輪跡から笹曲輪跡方向を見下ろしたところ

本曲輪跡から兵糧倉跡方向を見たところ

こちらは本曲輪跡から二ノ曲輪跡方向を見たところ

それでは本曲輪跡から二ノ曲輪跡へ進もう

ここは本曲輪跡から二ノ曲輪跡への土橋

土橋から左手の堀底を見たところ

video

右手の堀底に下りて、土橋越しに左手の堀跡を見たところ

video

反対に、左手の堀底から土橋越しに右手の堀跡を見たところ

左手の堀底を少し進んで見たところ

さて、ここを登ればニノ曲輪跡

そこで、左手を見たところ/堀跡がこの先で左手に折れている

こんな塩梅/堀跡の右上にニノ曲輪跡の平場が見える

video

さて、二ノ曲輪跡へ進もう

ここからが二ノ曲輪跡のエリア

二ノ曲輪跡はこの先で左手に回り込む平面形（コの字形）をしている

video

左手に回り込んだ先はこんな塩梅

video

「ニノ曲輪」と記された標柱が立っていた

video

説明板もある

現在地
100m
二ノ曲輪は本曲輪の櫓台を包み込むようにコの字形を示している。また折が多用されており凹凸が多い複雑な形を示している。曲輪の最大幅は東西60m、南北64mで、本曲輪より1mほど低く築かれている。曲輪内は平坦地であるが、東北の肩部には1mほどの小高い盛り上がりが認められる。二ノ曲輪を取り巻く空堀内に土橋状の遺構が認められ、現在この部分は三ノ曲輪からの通路となっている。

先端まで進んで、振り返って見たところ

video

ここは南側にある突き出し部分

video

その先端はこんな塩梅

そこで、振り返ってニノ曲輪跡を見たところ

video

東側には三ノ曲輪跡への通路がある/前方に見える平場は三ノ郭跡

それではニノ曲輪跡から三ノ曲輪跡へと進もう

ここが二ノ曲輪跡と三ノ曲輪跡の間の堀跡を渡る土橋

video

土橋の右手の堀跡を見たところ

video

左手の堀底に下りて、土橋越えに右手の堀跡を、そして左手の堀跡を見たところ

video

これは右手の堀底で、土橋越えで左手の堀跡を、そして右手の堀跡を見たところ

video

右手の堀跡を進んでみよう/前方で右手に折れている

こんな塩梅

そこで、振り返って見たところ/右上は三ノ曲輪跡

video

これは土橋越えに左手の堀跡を見たところ/右手に折れている

video

その先を見たところ/前方の上は三ノ曲輪跡

video

さて、ここが三ノ曲輪跡

video

前方で左手に回り込んでいる

「三ノ曲輪」と記された標柱が立っている

三ノ曲輪

説明板もあった

N
曲輪4
三ノ曲輪
虎口
現在地
馬出
二ノ曲輪
本曲輪
0
100m
三ノ曲輪は東西18m、南北60m程の細長い曲輪である。北部では土橋を通じて長さ50m、幅10mの曲輪へ連なる。また、南側には「馬出」から通じる通路状のルートがある。三ノ曲輪東部には、丘陵を南北に分断する形で「堀切」が配される。三ノ曲輪と曲輪4の間にある堀切は、北西部で根古屋虎口とつながっており、城内外を区分する大堀切となる。

回り込んだ先はこんな塩梅

video

そこで、振り返って見たところ/細長い曲輪であることが見て取れる

video

こんなに細くなった部分もある

そこで、右下の三ノ曲輪跡と二ノ曲輪跡との間の堀跡を見たところ

video

こちらは三ノ曲輪跡北側に続く平場/この部分も三ノ曲輪跡のエリアか・・・ video

さて、こちらは三ノ曲輪跡から南側の「馬出」へ続く通路

そこを先に進んでみる/堀切の土橋のような窪みがある

video

この辺りは「馬出」のエリアのようだ

video

そこで左手を見たところ

その左手の堀跡を見たところ

同じくそこで、「馬出」から三ノ曲輪跡へ続く通路を見たところ

それでは、「馬出」とニノ曲輪跡（右手）との間の堀跡に沿って、南方向に進んでみよう video

しばらく進むと、右手にニノ曲輪跡へ登る階段があった video

そこで、その先の堀跡を見たところ

video

同じく、振り返って堀跡を見たところ

video

それでは三ノ曲輪跡から曲輪4跡へ進もう

この下が三ノ曲輪跡と曲輪4跡との間の堀跡

video

曲輪4跡への土橋

振り返って、三ノ曲輪跡方向を見たところ

video

さて、ここが曲輪4跡

video

標柱が立っている

説明板もあった

N
曲輪4
現在地
三ノ曲輪
虎口
馬出
二ノ曲輪
兵舎
本曲輪
大堀曲輪
西曲輪
0
100m
曲輪4は、西側に幅5mの土塁状の遺構が認められる方形をした曲輪である。この曲輪からは西南方向に帯状の道が延びて大堀の肩部まで下り、馬出からの通路と合流する。

これは曲輪4跡の西側に残る土塁

video

その土塁上に登ってみたところ

video

そこから三ノ曲輪跡との間の堀跡を見たところ

video

南側から北方向に見た曲輪4跡

video

そこで、左手の土塁を見たところ

video

その土塁上から三ノ曲輪跡を見たところ video

これは曲輪4跡から東方向を見たところ/この先には腰曲輪跡との間の堀跡が南北に設けられている

video

さて、ここは城域の東側/ここから腰曲輪跡と曲輪4跡との間の堀跡に進んでみよう

ここから城域となる

曲輪4跡方向に進む

この先の上が郭4跡

そこで、右手を見たところ/これが曲輪4跡と腰曲輪跡（右手）との間の堀跡

video

その堀跡を北方向へ進もう

video

前方が開けている

video

その開けたエリアも腰曲輪跡のようだ

そこで、振り返って見たところ

video

これは、堀跡を戻って曲輪4跡方向へ進んだところ/この上が曲輪4跡

video

さて、北東側から城域に進み、その前方の惣曲輪跡への虎口手前から、三ノ曲輪跡と曲輪4跡との間の堀跡を南方向に進んでみよう

この前方に惣曲輪跡への虎口があるようだ

video

その虎口の手前で左手を見たところ/前方に三ノ曲輪跡と曲輪4跡との間の堀跡があるようだが・・・

近づいて見ると、左手に入って行くような堀跡がある/これが三ノ曲輪跡と曲輪4跡との間の堀跡

その堀跡を進んでみよう

折れを伴いながら南方向に続いている/左手が曲輪4跡、右手は三ノ曲輪後

video

その先に進んだところ

更にその先の様子

video

すると、曲輪4跡（左手）と三ノ曲輪跡（右手）とを繋ぐ土橋に出た

土橋をアップで見たところ

そこで、右手を見たところ/ここを登って行くと三ノ曲輪跡

同じく、左手を見たところ/この上は曲輪4跡

そこで振り返って見たところ

video

これはその土橋を越えて、振り返って土橋を見たところ

video

少し退いて見たところ

video

それでは、虎口から惣曲輪跡へ進んでみよう

虎口から惣曲輪跡へ向かう右手には、土塁と堀跡が残っている

video

その堀跡を見たところ/右手に緩やかに下がっていく

堀跡を進んでみよう/左手は土塁

video

前方は薬研堀のような状況になっている

そこで、振り返って見たところ

右手の土塁に登ってみよう/二重土塁になっている

video

土塁上から堀跡を見下ろしたところ

video

さて、ここが惣曲輪跡/かなり広い平場だ

そこで、右手を見たところ

video

これは惣曲輪跡から兵糧倉跡方面へ向かう虎口

その先はこんな感じで少し登っている

その右手を見ると堀跡があり、右手に下っている

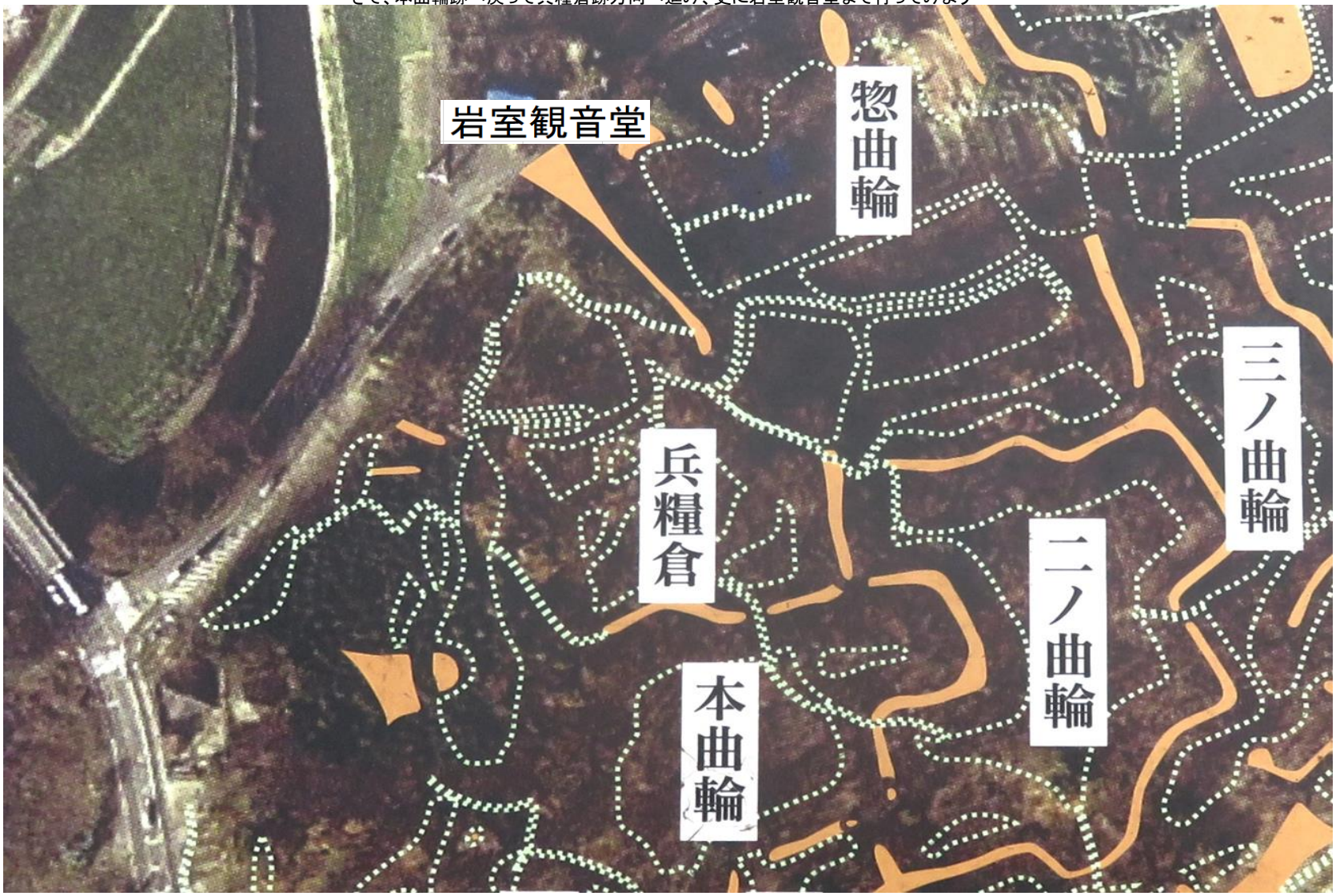
そこで、振り返って惣曲輪跡方向を見たところ

video

これはそこからもう少し兵糧倉跡方向に進んだところ

そこで、右手を見ると先程の堀跡が前方に下っている/その先に建物が見えるが、それが岩室観音堂で、この堀跡は（伝）搦手口とされるようだ video

さて、本曲輪跡へ戻って兵糧倉跡方向へ進み、更に岩室観音堂まで行ってみよう



正面下は本曲輪跡（手前）と兵糧倉跡（前方）との間の堀跡で、土橋が見える

その土橋をアップで見たところ

video

土橋を渡った先が兵糧倉跡/標柱が立っている

video

振り返って土橋方向を見たところ

そこで、右手を見たところ/左上が本曲輪跡方向

兵糧倉跡の先へ進もう/左手は腰曲輪跡のようだ

video

更に進むと城域北側の先端辺りに至る

そこで、右下を見ると岩室観音堂の屋根が見える

video

ここを右手に下って行く通路がある

そこを進んでみよう

すると左手に堀跡（竪堀と思われる）があり、その前方に岩室観音堂が見える/この堀跡が（伝）搦手口

video

薬研堀のような堀跡を下って行く

これは途中で、振り返って見たところ

video

堀跡を下り切って、振り返って見たところ

video

さて、これが岩室観音堂/江戸時代中期の再建

video

比企郡吉見町の指定文化財 video

懸造り様式となっており、江戸時代のものとしては珍しい建物であることが記されている

video

岩室観音と石仏

岩をうがって観音像をまつったところから岩室観音という。龍性院の境外仏堂である。

この観音のはじまりは弘仁年中（八一〇～八二四年）といわれているが、たしかな記録は残っていない。

松山城主が代々信仰し護持していたが、天正十八年（一五九〇年）松山城の攻防戦の際に兵火にあって当時のお堂は焼失してしまった。

現在のお堂は、江戸時代の寛文年間（一六六一～一六七三年）に龍性院第三世堯音が近郷近在の信者の助力を得て再建したものである。お堂の造りは懸造り様式で、江戸時代のものとしては、めずらしいものである。

また、ここにある石仏は、四国八十八ヶ所弘法大師巡錫の霊地に建てられた寺々の本尊を模したもので、八十八体の仏像がまつってある。

また、この石仏をおがめば、いながらにして四国八十八ヶ所を巡拝したのと同じ功徳があるとされている。

平成十年三月

吉見町・埼玉県

胎内巡り

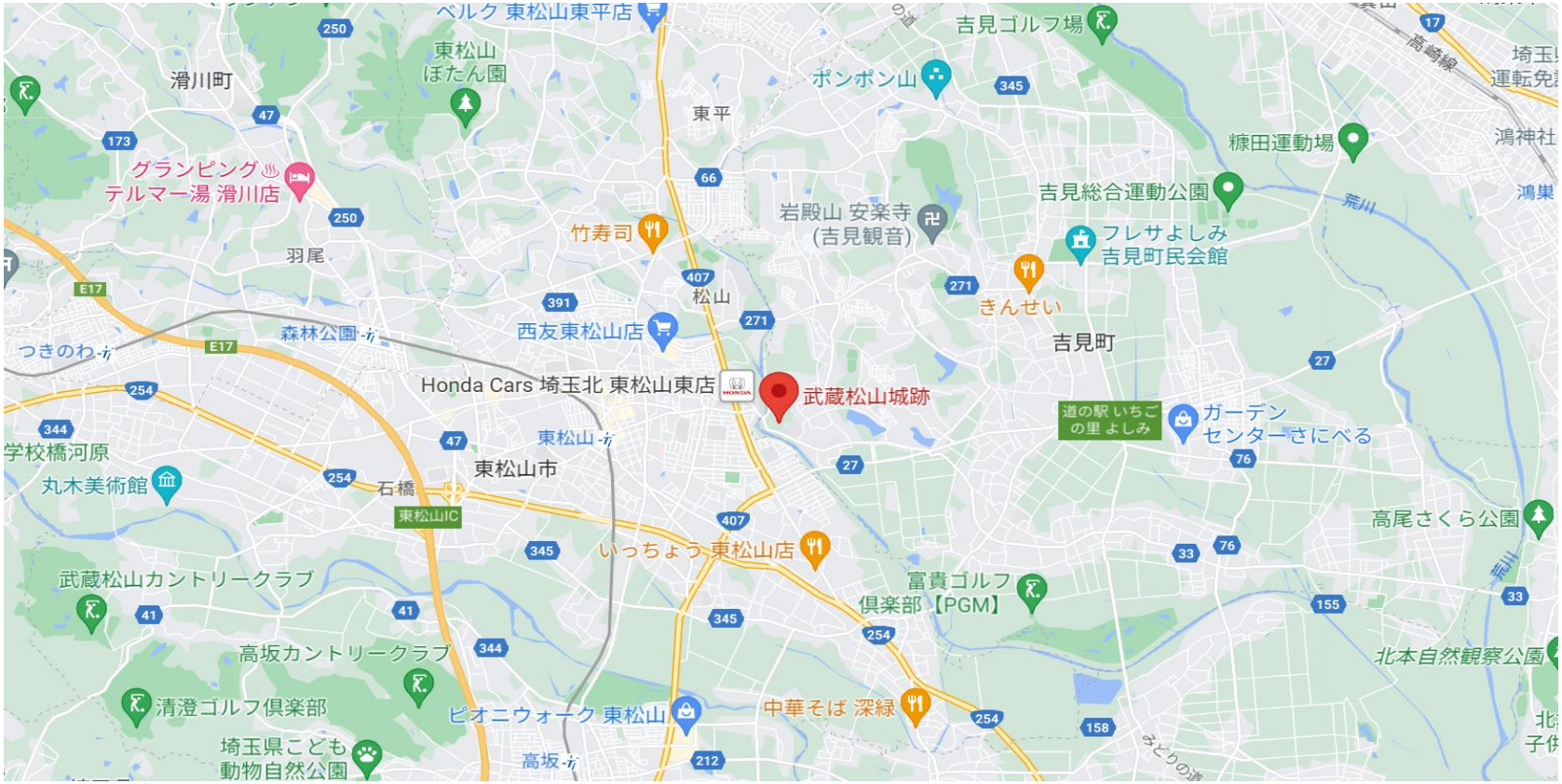
八十八ヶ所巡り

八十八ヶ所巡り

吉見町
ふるさと歩道施設
設置：埼玉県自然保護課
管理：吉見町都市計画課
制作年度：平成9年度
管理番号：4

これは北西側から、天然の要害となっている市野川越しに松山城跡を見たところ

video


ベルク 東松山東平店
東松山
ほたん園
滑川町
グランピング♨
テルマー湯 滑川店
羽尾
東平
ポンポン山
吉見ゴルフ場
糠田運動場
吉見総合運動公園
岩殿山 安楽寺
(吉見観音)
竹寿司
フレサよしみ
吉見町民会館
きんせい
松山
西友東松山店
森林公園
つきのわ
Honda Cars 埼玉北 東松山東店
武蔵松山城跡
吉見町
道の駅 いちご
の里 よしみ
ガーデン
センターさにべる
学校橋河原
東松山
東松山市
丸木美術館
石橋
東松山IC
高尾さくら公園
いっちょう東松山店
武蔵松山カントリークラブ
富貴ゴルフ
倶楽部【PGM】
高坂カントリークラブ
北本自然観察公園
清澄ゴルフ倶楽部
ピオニウォーク 東松山
中華そば 深緑
埼玉県こども
動物自然公園
高坂
鴻神社
鴻巣
荒川
高崎線